

「わがこと・ひとごと」の観点と文法論

渡 辺 実

キーワード…わがこと・ひとごと 助動詞 やる・もらう・

くれる 仮定条件・確定条件 「のだ」構文 指

示の歴史

要 旨

言葉は話手個人から出るものだけでも、話手個人を離れることで客観的な文となる。最終的に話手を離れる前の段階で、日本語では、話手自身のこと（「わがこと」と呼ぶ）と把握するか、話手に関わりなく成立すること（「ひとごと」と呼ぶ）と把握するか、を表現する水準があるように思われる。それは西洋諸語の人称の区別に対応するもののように思われるが、述語に下接する助動詞・終助詞群において、それが線条的分布の形で集中的に現れるのが日本語的である。また授受益表現も「わがこと・ひとごと」の線で説明し得る部分を有する他、「のだ」構文その他、同じ観点から検討してみるべき領域が多いように思う。

一

副用語類を調べていると、気になることにつき当ることがある。

「わがこと・ひとごと」と本稿で呼ぶのもその一つで、そうした観点

を文法論の諸領域に持ち込んだらどうかを考えてみたいのだが、こんな気ままな言葉術語めかせて話を進める時は、まず言語事実という動かぬ現象から出発するのが、採るべき道というものであろう。

ずいぶん おとなしい 男だね

いま出発するとは 彼も ずいぶん 乱暴だな

のように用いられる「ずいぶん」という副用語は、程度副詞と呼ばれるものの一つで、性質状態の程度が大であることを意義として担い、したがって構文的には、性質状態を意義として担うところの形容（動）詞類を連用修飾する、と記述することが出来る。その点で

大へん おとなしい 男だね

誰が何と言おうと 彼は 大へん 乱暴だよ

における「大へん」の同類と考えてよい。

*彼は 彼女より 大へん 色白だ

*彼は 彼女より ずいぶん 色白だ

などと、比較構文に立ち得ない点でも両者は同類で、私が「発見系・非評価系」と呼んでいる類に属する^{注1}と観察される。

ところが、「大へん」と「ずいぶん」とは、同類であるにもかかわ

らず、その実際の使用においてやはりいささかのくい違いを示す。

すなわち「大へん」の方は

この本は 大へん ぶ厚いね

私は 大へん 嬉しいよ

の両方が可だが、「ずいぶん」の方では

○この本は ずいぶん ぶ厚いね

*私は ずいぶん 嬉しいよ

のように、前者は可だが後者は不可、という偏りを示す。類例を増して整理すれば

大へん

○ぶ厚い／明るい／静かだ／大人しい／たくましい／素直だ：
い／素直だ：
○嬉しい／悲しい／楽しい／淋しい／好きだ／嫌いだ……

ずいぶん

○ぶ厚い／明るい／静かだ／大人しい／たくましい／素直だ：
い／素直だ：
*嬉しい／悲しい／楽しい／淋しい／好きだ／嫌いだ……

のようになろう。すなわち「大へん」が、形容(動)詞でさえあれば恐らく個々の語を選ぶことなく、それと共起して連用修飾関係を結ぶのに対して、「ずいぶん」は、形容(動)詞であつても共起制限を持つ。その「ずいぶん」と共起しようとしなないのが

○私は 嬉しい(悲しい／楽しい……)

*彼は 嬉しい(悲しい／楽しい……)

など、「私は」の述語とはなり得ても「彼は」の述語とはなり得ない形容(動)詞群であることは、一見して諒解されるであろう。このよ

うな、話手「私」のことを述べることは出来ても、他人「彼」のことを述べることの出来ない語の存在は、周知のことであろうが、それを本稿では「わがごと」性の語と呼ぼうとするのである。「わがごと」の対立概念は「ひとごと」であつて、つまるところ、「嬉しい／悲しい……」などは「わがごと」性を意義素性として有し、「ぶ厚い／大人しい……」などは「ひとごと」性を意義素性として有する、という言い方をしようということになる。同じことを逆から言えば、「ずいぶん」は「ひとごと」性を有し、それ故に「ひとごと」性の形容(動)詞とは共起するけれども、「わがごと」性形容(動)詞とは、その意義素性の不協和の故に共起しないのだ、と解したいのである。副用語の「ずいぶん」が「ひとごと」性のものであることを考えさせる言語事実は、他にも挙げることが出来る。すぐ気付かれる事実だが、「ずいぶん」は前述のように

*彼は ずいぶん 嬉しい(悲しい／楽しい……)

といった共起制限に縛られているのだが、これらの非共起「わがごと」性形容(動)詞に助動詞の「そうだ」を下接させて

○彼は ずいぶん 嬉し(悲し／楽し……) そうだ

のようにすると、一転して適格表現となる。この適性転換のカギとなつている「そうだ」は、

*私は 嬉しそうだ *私は 行きそうだ

○彼は 嬉しそうだ ○彼は 行きそうだ

などの適格不適格が示すように、「わがごと」を表現できない「ひとごと」性の助動詞なのであつて、それ故に「ずいぶん」との共起を回復するのだと思われる。

このことは同時に、助動詞「そうだ」が下接することによって、

上接する「嬉しい(悲しい/楽しい)」などがそれ自体として有する「わがこと」的意義素性が、中和され或いはむしろ「ひとごと」化されることを示す事実であろう。日本語の表現では、述語で述べた後に、助動詞や助詞がいろいろ下接して、表現に水準の異なる色どりを添加してゆく。その下接要素は上接要素を支配するような形ではたらくらしいのだが、その一つに「わがこと・ひとごと」といった要素があつて、少くとも或る水準にあつては、「わがこと」の要素(例えば「嬉しい」が「ひとごと」の要素(例えば「そうだ」を下接させること)によつて、それに支配されるような形で、「ひとごと」化を蒙る、ということ)を認めるべきだと思われる。それは、「そうだ」になお上接する「せる・れる」が、

彼が 行く ↓ 彼に 行かせる

犬が 咬む ↓ 犬に 咬まれる

のように、その上接要素の格関係を変更させる力を持つのに似た、ただし一段階力の弱まった水準のもの、と思われる現象であり、これが述語表現におけるどの水準で認め得ることなのか、以下に検討を加えるつもりなのだが、少くとも意義素性の中和なり転換なりを考えないと、「嬉しい」などにあつた「ずいぶん」との共起制限が、「そうだ」の下接によつて解消する事実は、うまく理由づけられないのではないかと考える。

述語表現の世界に「ひとごと」性を持ち込むのが「そうだ」であるとするれば、同じ述語表現の世界に「わがこと」性を持ち込むのが、助動詞「たい」であろう。

○私は行き(帰り/飲み/眠り……)たい
*彼は行き(帰り/飲み/眠り……)たい

のように、いわゆる願望の助動詞「たい」は、話手自身の「わがこと」表現には使えるけれども、他人の「ひとごと」表現には使えない、という風に、「そうだ」と対蹠的な振舞いを示す。「たい」が「わがこと」性助動詞であることはもはや言うに及ばず、確めたいのは「たい」の下接によつて、上接語の「ひとごと」的意義素性が中和されたり「わがこと」化したりする事実の有無だが、「わがこと」専用の「嬉しい」などに匹敵する形の、「ひとごと」専用の言い方は乏しいようで、そのあたりは確かめにくい。それよりもここで顧みておきたいのは、日本語の「私・彼」は、決して西洋の、例えば英語の「I・he」と全同でない、ということについてである。いまさら言う必要もない常識めいたことだけれども、「I」と「he」それに「you」も加えて、三者の間には、日本語における「わがこと・ひとごと」の如き対立は希薄で、むしろ有情主表現も無情主表現なみに言わば「よそごと」的に扱われるような所がある。それに対して日本語では二人称が多くの場合に「ひとごと」として三人称と同類をなし、一人称の「わがこと」と対立する。

*あなたは 嬉しい(悲しい/楽しい……)
のように。一・二・三人称の呼びわけは便利で、日本語研究の上でも保存に値するが、それは西洋の人称代名詞ときれいに対応する三つではないことを承知しておきたい気がする。

それに関連して注意に値するかと思われるのが、「たい」「そうだ」の、助動詞としての存在自体である。日本語の助動詞は次頁に表示のような、二種三類に整理するのがよいと信ずること、むかし発表した通りだが、これらの助動詞群の中で、「たい・そうだ」は他に對

		第1類			第2類		第3類
甲種			だ	らしい		だろう	
乙種	せる						
	れる	たい	そうだ	ない	た		
						う	まい

して、少し異質なのであった。助動詞は述語表現における色彩づけの色々に応じて分化したものと思われ、それはかなりの普遍性をもつと期待される。現に乙種1類の「せる・れる」は西洋言語学の言うヴォイス、乙種2類の「ない」はネゲーション、同「た」はテンス乃至アスペクト、3類は甲種乙種ともムード、甲種は123類ともプレディケーションという風に、西洋言語学の方でも立てざるを得ない文法範疇に属する。それら助動詞の中で「たい」の願望、「そうだ」の様態は、普遍的文法範疇らしさを欠くのである。どうして日本語では、こんなものが助動詞の中に正位置を持っているのか、気づいて見れば不思議なことではあった。だが恐らくこれは、西洋言語学の「人称」に対応する態のものではあるまいか。日本語は言語主体の側に属する意義に対して温かく、対して西洋諸語は対象の側に属する意義にエネルギーを注ぎこもうとする言語である、という大まかな対比を、従来の主張とする立場から見ると、西洋の人間が西洋の言語を土壌に人称として作り上げたものが、日本人によって日本語を土壌として育てられると、「わがごと・ひとごと」となるのだ、ということのように考えられる。その意味で、「たい・そ」うだ」は人称相応の文法範疇として助動詞の中に位置を占め、人称代名詞「わたし」「あなた・かれ」も実質的には、「わがごと」「ひとごと」の代名詞である、と言ってよいのではないかと思うのだが、

いかなるものであろうか。

二

右に述べたような「わがごと・ひとごと」の観点を、文法論の諸領域に持ち込むとして、話の流れからは、さしずめ助動詞を採り上げるのが順序であろう。すでに「たい・そ」うだ」は検討済みだから、当然それ以外の助動詞が観察の対象である。

まず「たい・そ」うだ」に上接する「せる・れる」からとりかかる時、すぐに浮び上るのは、日本語らしいところの、言い換えれば西洋諸語に見出し難いところの、使役表現・受身表現であろう。すなわち
雨に降られる／母に死なれる／隣にビルを建てられる

などの、いわゆる「迷惑の受身」は、受動表現に主体的意義を持ち込んで、自分自身の意と無関係に実現してしまう事態、すなわち「ひとごと」的事態と扱ったものに相当しよう。雨に降られることをわが身の被害と把握するからこそ「迷惑」の受身なのだ、という点から言くと、「わがごと」表現のようなのだが、雨に降られることを、相談もなく身に及ぶ出来事と、「ひとごと」把握する表現と思われる。多分に「よそごと」風に言う傾向にある西洋諸語では、他動表現があれば、その目的語を主語に据え換えた受動表現を、言わば機械的に作るこゝとが出来来る。かくて無情主語の受動表現は普通のことである。対して

駅前　ビルが　建てられた

という言い方をまだ少々なじまぬ言い廻しとする日本語は、一切を対象的に言うことに不得手であつて、迷惑の意味の目立たぬ

彼は　犬に　咬まれた

すう、彼を被害者として言うのだと思われる。使役の「せる」の方

には、これほどはつきりしたものは無いが、昔あった

兜の内を 射させて

は、意に反して実現を許してしまった「ひとごと」性の主体的使役表現であらうし、

好きにさせておきなさい

は、その尾を今に引いた言い方と思われる。第1類の助動詞としては、まだ甲種の「だ」があるが、これは日本語の助動詞の中で最も「よそごと」性の濃いものと認められよう。

私は 学生だ

彼は アメリカ人だ

あれは 土佐犬だ

など証拠を挙げるまでもない。残るのは第2類、第3類の助動詞だが、これはどうやら二グループに分けられそうなのである。

右に「よそごと」と呼ぶ所は、「わがごと」「ひとごと」の対立を越えた概念だが、「わがごと」と「ひとごと」とは、同位の対立概念であつて、その限りでは択一的な関係にあるもののはずである。だが現実にはその択一性は、さほど厳格なものではない。

彼は 行きたそうだ

のように、「わがごと」の「たい」に、「ひとごと」の「そうだ」を下位承接させる表現は、日本語として適格なのである。「そうだ」の下接しない

*彼は 行きたい

は不適格であるのに、「そうだ」の下接が「たい」の「わがごと」性を中和し或いは「ひとごと」化するからであらう。それは

*彼は 嬉しい

が不適格なのに、「そうだ」を下接させた

彼は 嬉しそうだ

は適格となったのと、全く同じ出来事である。一方、それ自体として適格な

私は 嬉しい

私は 行きたい

に「そうだ」を下接させた

*私は 嬉しそうだ

*私は 行きたそうだ

は共に不適格であるが、それも「そうだ」による「ひとごと」化が、「わがごと」の「私」との衝突を引きおこすからだと判断してよいであらう。こうした「わがごと」性の転換ということを頭において、第2類・第3類の示す言語事実をながめて見る。

○私は 嬉しい

○私は 行きたい

* | 嬉しそうだ

* | たそうだ

○ | 嬉しくない

○ | たくない

○ | 嬉しかった

○ | たかった

* | 嬉しいらしい

* | たいらしい

* | 嬉しからう

* | たかろう

*彼は 嬉しい

*彼は 行きたい

○ | 嬉しそうだ

○ | たそうだ

* | 嬉しくない

* | たくない

* | 嬉しかった

* | たかった

○ | 嬉しいらしい

○ | たいらしい

○ | 嬉しからう

○ | たいからう

○ | 嬉しからう

○ | たかろう

こう並べたてると現象は複雑なようだが、要は「らしい・だろう・う」の三つは「そうだ」と同じ振舞いをし、「そうだ」と異なる振舞いをする「ない・た」と対立する、と単純化することが出来る。その限り「らしい・だろう・う」の三語は、「ひとごと」系の助動詞である、ということになる。「らしい・だろう・う」は、それ／＼話手の推定や推測を表わし、はなはだ言語主體的意義の濃厚なものと思われるから、むしろ「ひとごと」系には属さないように見えるかも知れないが、主體的意義が濃いということがすなわち「わがごと」的だということではない。迷惑の受身がそうであつたように、「ひとごと」と扱うことも主體的なのである。要するに推定や推測という判断態度それ自体は主體的であつても、やはりこれらは判断にかかわる助動詞であつて、判断内容という対象的素材を必要とし、上接する表現を「ひとごと」化するであろう。

一方の「ない・た」は、それでは「わがごと」系の助動詞かという、これはどうもそうではないらしい。

* 私は 嬉しそうだ

○ そうでない

* そうだった

* そうらしい

* そうだろう

○ 彼は 嬉しそうだ

○ そうでない

○ そうだった

* そうらしい

* そうだろう

* 私は 行きそうだ

* そうでない

* そうだった

* そうらしい

* そうだろう

○ 彼は 行きそうだ

○ そうでない

○ そうだった

* そうらしい

* そうだろう

と観察を拡げて見ると、「ない・た」は「わがごと・ひとごと」といった対立の中にはないらしい、と見た方がよさそうである。すなわち適格表現

○ 私は嬉ししい ○ 私は行きたい

○ 彼は嬉しそうだ ○ 彼は行きそうだ

に「ない・た」を下接させたものは全部適格であり、不適格表現

* 彼は嬉ししい * 彼は行きたい

* 私は嬉しそうだ * 私は行きそうだ

に「ない・た」を下接させたものは全部不適格である。「そうだ・らしい・だろう・う」の下接が、適格表現

○ 私は嬉ししい ○ 私は行きたい

○ 彼は嬉しそうだ ○ 彼は行きそうだ

を不適格に導き、不適格表現

* 彼は嬉ししい * 彼は行きたい

を適格に導いたようなことは、「ない・た」には見られないのである。「ない・た」はこのような事実を根拠に、「わがごと・ひとごと」範疇外の、「よそごと」系助動詞と位置づけてよいのであるまいか。

いま「ない・た」の性質を対比的に明らかにする目的で、「らしい・だろう・う」がもつ、不適格表現の適格転換を引き合いに用いたが、「らしい・だろう・う」の適格転換が、あらゆる不適格表現に対して有効にはたらくわけではない。

* 私は嬉しそうだ * 私は行きそうだ

に「らしい・だろう・う」を下接させた言い方は、先に観察した通り、適格転換したりはしない。「らしい・だろう・う」は、「わがごと」述語を「ひとごと」化して、「ひとごと」主語と調和させること

は出来ても、「ひとごと」述語を「わがこと」化して、「わがこと」主語と調和させることは出来ないのである。そしてこの事実を、「らしい・だろう・う」が「ひとごと」系であることを再確認させる事実であると共に、「わがこと」は「ひとごと」化することが容易だが、「ひとごと」を「わがこと」化するのには容易でない、ということを示す事実でもあろう。二つの中の後者については、或いは当り前のことだったのかも知れない。日本語の「私」は、「嬉しい」などの主格としてあくまで「わがこと」の代名詞ではあるけれども、「彼」と同水準に、言わば「よそごと」的な「I」に近い水準で使うことも可能であり、一方「彼」は、日本語でも「わがこと」の主格としては使い難い、ということが、事の真相を極めて簡単に語り尽しているとも言えるだろう。要するに「わがこと」が特殊なのである。日本語の話し手が「わたし自身のことなのだ」と、当事者の心を離さないで言うのが「わがこと」表現なのである。「ひとごと」は「わがこと」の対立概念として特殊なのだということであろう。

ただし二つの中の前者、すなわち「らしい・だろう・う」の「ひとごと」性については、なお言い添えるべきことが残っている。先に列挙した観察において

*彼は嬉しそうらしい *彼は行きそうらしい

*彼は嬉しそうだろう *彼は行きそうだろう

を不適格としたが、そしてそれを修正する必要はないと考えるけれども、上接部分が他人の判断の引用、すなわち伝聞（「らしい」^念押し「だろう？」）である時は、適格と扱われねばなるまい。話手自身の判断としてでなく、他人の判断に依存して、聞く所ではそうであるようだと推定し、そう認めてよいかねと確める、という表現は、

一段と「ひとごと」性の強い内容を対象とする推定であり確めてあって、「らしい・だろう・う」の「ひとごと」性が、それ自体「ひとごと」に属する「そうだ」を、更に一段「ひとごと」化する事実と見てよからう。そのような点からは

私は嬉しそうらしい 私は行きそうらしい

私は嬉しそうだろう？ 私は行きそうだろう？

なども適格であらうし、それは「私」の「ひとごと」化でもあるだろう。その「私」の「ひとごと」化を押し進めれば

(どうやら) 私は嬉しい(行きたい)らしい

(そんなケースなら) 私は嬉しい(行きたい)だろう

なども、自分を「ひとごと」と扱う、日本語としてはぎりぐりの表現として、適格の線上に浮上させてよいかもわからない。

ただしこうしたぎりぐりの表現の可能性も、助動詞の世界を離れて終助詞の世界に入ると、閉されてしまうようである。

*私は 嬉しいか (○私は嬉しい)

*私は 行きたいか (○私は行きたい)

は、ぎりぐりの表現としても不可能なのではあるまいか。だとすれば「らしい・だろう・う」において可能であったことが、どうして「か」において不可能なのかが問題となるが、それについては「か」に関して、今までと同様な観察を試みることで答えを導くべきであらう。すなわち「か」の振舞いは

*彼は 嬉しいか (*彼は 嬉しい)

*彼は 行きたいか (*彼は 行きたい)

○私は 嬉しそうか (*私は 嬉しそうだ)

○私は 行きそうか (*私は 行きそうだ)

○彼は 嬉しそうだ (○彼は 嬉しそうだ)

○彼は 行きそうか (○彼は 行きそうだ)

と観察され、今までのどの助動詞とも異なる様相を示す。その限り甚だ複雑な印象を与えるが、この複雑な振舞いの解釈は、いままで触れずに来た二人称「貴方」の表現とのからみに、手がかりを求めることが出来ると思われる。すなわち

*貴方は嬉しい *貴方は行きたい

が不適格であり

○貴方は嬉しそうだ ○貴方は行きそうだ

が適格であることが示すように、「貴方」は「ひとごと」なのだが、これらに「か」を添えると

○貴方は嬉しうか ○貴方は行きたいか

*貴方は嬉しそうか *貴方は行きそうか

のように、適不適が逆転する。右に見た一人称の

○私は嬉しい ○私は行きたい

*私は嬉しうだ *私は行きそうだ

が、「か」の下接によって適不適逆転するのは、二人称の逆転の、まさに裏であったのである。つまり疑問文「か」においては、一人称は聞手にとって二人称であり、二人称が一人称である、という事情が、これらの逆転の原因と思われる。例えば

貴方は嬉しいか

*私は嬉しいか

という疑問文は

貴方は「私は嬉しい」と思うか

*貴方は「貴方は嬉しい」と思うか

という問いであるから、適不適が逆転するのである。その点、話手と聞手との立場の交替にかかわりのない三人称表現が、「か」の性質を素直に反映しよう。すなわち三人称表現では適格表現に「か」を添えたものは適格、不適格表現に「か」を添えたものは不適格で、「ない・た」と同じ「よそごと」的な振舞いを示す。そしてその「よそごと」的振舞いは、述語表現の世界で「か」よりも下接する終助詞において、完全となる。

○私は 嬉しいね (さ/よ)

(○私は嬉しい)

*彼は 嬉しいね (さ/よ)

(*彼は嬉しい)

*私は 行きそうだね (さ/よ)

(*私は行きそうだ)

○彼は 行きそうだね (さ/よ) (○彼は行きそうだ)

など、わざと観察例を挙げるまでもなく、終助詞は適格表現に下接し、不適格表現には下接せず、「ない・た」と全く同じ振舞いをするのである。このことは話者が自分で描いて来た話の内容を、自分から切り離し、「よそごと」とすることで、文というものが成立する、という事情の反映に違いない。そしてそこに至る途中に、「わがごと」と「ひとごと」の世界があるのであろう。話手が「わがごと」と把握するか、「ひとごと」と把握するか、中和転換を含めた選択操作の余地は、「らしい・だろう・う」の助動詞水準までは存するが、終助詞水準に及べば、選択操作の余地は無くなって表現は「わがごと」離れし、次いで「ひとごと」離れをして「よそごと」の文末へと向うものらしい。助動詞こそが、「わがごと」把握か「ひとごと」把握かを言語に表現する水準なのである。「だろう・う」が、既に活用を失って形態的に不変化の助詞に等しいにもかかわらず、なお助動詞と扱われて来た事実は、共時的にも理由のあったことと言うべきで

はなかるうか。

以上の観察を、二人称表現も含めて、念のため表示する。

たい・そうだ	ないた	らしい・だろう・う	か	さ・よ・ね
○私は 嬉しい	○	△	*	○
*貴方は 嬉しい	*	○	○	*
*彼は 嬉しい	*	○	*	*
○私は 行きたい	○	△	*	○
*貴方は 行きたい	*	○	○	*
*彼は 行きたい	*	○	*	*
*私は 嬉しそうだ	*	△	○	*
○貴方は 嬉しそうだ	○	△	*	○
○彼は 嬉しそうだ	○	△	○	○
*私は 行きそうだ	*	△	○	*
*彼は 行きそうだ	*	△	*	○
○貴方は 行きそうだ	○	△	○	○
○彼は 行きそうだ	○	△	○	○

○適格、*不適格、△「ひとごと」化(一層の「を」を含む)によって適格

「たい・そうだ」に助動詞としての位置を与えた日本語が、「らしい・だろう・う」の水準まで「わがこと・ひとごと」の選択の余地を行き来し、終助詞水準で表現が固まって行く有様を示すものとして読むことが出来るように思われる。

三

以上は「私・彼・(貴方)」を主格にもつ表現を主軸に、「わがこと・ひとごと」の観点を導入する意味を検討し、それが人称に通ずる性質を持つのではないかということを見たのであるが、もしも「わが

こと・ひとごと」の観点を、人称表現とのからみから解放すること
で、もう少し延長し拡大することが許されるならば、様々な領域への
展開を考えることが出来るように思われる。

まず、今まで述べて来た述語部分における「わがこと・ひとごと」
表現に最も近く位置するものとして、「やる・もらう・くれる」の、
授受益表現を採り上げてみる。この授受益表現は

彼は 教えてやった (あげた)

彼は 教えてもらった (いいただいた)

彼は 教えてくれた (下さった)

のように、行為を、単に為手(主格者)から受手(与格者)に対して
行われる行為としてにとどまらず、それが利益の授受と言うに値す
る行為として把握した表現で、迷惑の受身に似た価値導入的・評価
的な色彩の加わったもの、その意味で三つとも事態を主体的に把握
したものと言えそうなのだが、その主体性の内実は決して簡単では
ないようなのである。まず人称とのからみを見ると

私は 教えてやった (あげた)

私は 教えてもらった (いいただいた)

*私は 教えてくれた (下さった)

のように、「くれる」だけが「私は」と共起せず、その限り「ひとご
と」系かと思われる振舞いを示す。因みに「貴方は」に関しては

貴方は 教えてやった (あげた)

貴方は 教えてもらった (いいただいた)

貴方は 教えてくれた (下さった)

の全部が適格で、「やる・もらう」の方には主格人称の共起の制約は
一切なく、その限り「くれる」と逆に「よそごと」系かと思わせる

振舞いを示す。だがこちらには与格に立つ人称に制限があり

*彼は 私に 教えてやった

*彼は 私に 教えてもらった

は不適格で、やはり「わがこと」性のからむものであることが明らかである。この間の事情を整理すると

私に 貴方に 彼女に

やる (あげる)

私は	／	○	○
貴方は	＊	／	○
彼は	＊	○	○

もらう (いただく)

私は	／	○	○
貴方は	＊	／	○
彼は	＊	○	○

くれる (下さる)

私は	／	○	○
貴方は	○	／	○
彼は	○	○	／

のようにならう。この適不適分布は、「私に」を拒否する「やる・もらう」と、「私は」を拒否する「くれる」との対立として把握することが出来る。この中「くれる」が「私は」を拒否することは、助動詞「そうだ」がその「ひとごと」性の故に

*私は 行きそうだ

などと「私は」を拒否したことで、見かけの現象は同じだが、その内実は異らう。「くれる」は、構文的には与格にある受益者の立場に心理的焦点を置く、という意義のもの、すなわち与格の「わがこと」表現であるために、主格の「わがこと」を拒否するのだと思われる。「わがこと」の焦点が同時に二つはあり得ないからである。もともと

受益者の立場に心理的焦点を置く点では、「もらう」も「くれる」と同じだが、これは心理的焦点の受益者を主格に立てるところの、主格の「わがこと」表現であり、その点で授益者焦点・授益者主語の「やる」と性質を共にして「くれる」と対立する。だからこそ「やる・もらう」は、与格の「わがこと」表現たる「私に」を拒否するのだと思われる。焦点と主格とが一致する「やる・もらう」は、利益の授受を話題の人物間のもの、と把握した言い方で、その意味で、「わがこと」性の焦点を主格者に注入した表現であり、「私に」が「わがこと」性の焦点顔をして登場するのを嫌うのである。これに対して焦点を主格から分離させた「くれる」は、構文上の脇役にすぎない

与格者に「わがこと」の焦点を移す言い方であって、その分離が可能なのは、与格者の受益が話手の「わがこと」的受益感覚と一致することを条件としてのことなのである。例えば

彼が 彼女に 教えてくれる

は適格だが、話手がこの事態を望んでいるのでなければ、こうは言えない表現であろう。この表現の眞の受益者は、言われていない「私」のために、私の希望を容れて」である、と言っても過言でない。授受益表現は、利益の授受ということが、「わがこと」的色彩が強く、利益の焦点はただでさえ話手であろうとする勢をもつ。だから与格に「私に」を持ち込めば、それは話手の「わがこと」表現になつてしまふのである。「やる・もらう」は「私に」を拒否することで、その「わがこと」性を、かろうじて話題の人物間の水準に保ち得ている観がある、というものである。話手自身が授受益の「わがこと」的焦点に立とうとする勢は

一つ根性をたたき直してくれる

など、話手自身を受益者とする、受益者主格・受益者焦点の表現に、「くれる」を進出させてしまうほどなのである。

これらの授受益表現を、助動詞相互承接の秩序の中に割り込ませてみると

教えさせてやる（もらう／くれる）

（替りに）叱られてやる（もらう／くれる）

教えてやり（もらい）たい

教えてやり（もらい／くれ）そうだ

のように、ヴォイスの「せる・れる」と「わがこと・ひとごと」の「たい・そうだ」との中間に現れるのを原則とする。こうした助動詞との組み合わせの中で

*教えてくれない

だけが不適格なのが目立つが、これは「くれる」が前述のように、与格にある話手の、強い「わがこと」表現であつて、主格にある話手の「わがこと」表現である「たい」とは、あい容れないからである。「くれる」は与格に立った話手が、「たい」は主格に立った話手が、それぞれ自分の「わがこと」を表現する言い方として言わば補い合つている恰好である。つまるところ

教えてもらいたい

という話手の受益願望の実現する姿が

教えてくれる

という話手の利益享受なのである。「たい」は願う「わがこと」的状態、「くれる」は願いの叶う「わがこと」的状態、として補い合つている。「くれる」はこの意味で「たい」の水準の表現である。だから

教えてやってくれる

教えてもらってくれる

が適格表現で

*教えてくれてやる

*教えてくれない

は不適格となるのであろう。授受益表現間の相互承接では

教えてやってもらう

教えてもらう

が共に適格だが、これは「やる・もらう」の「わがこと」性が、前述の通り登場人物間のもの、事柄のあり方の水準のものだからに違いない。授益者主格で言うか受益者主格で言うかで別れる「やる・もらう」は、能動者主格で言うか被動者主格で言うかで別れる使役・受身の水準に近い性質のものと判断される。相互に上接下接する「やる」「もらう」が、「くれる」には常に上接する所以である。

事柄のあり方の水準で「わがこと・ひとごと」の把握があるとすれば、もう少し範囲を延長して、叙述の内部にもそうした観点を導入し得る領域がありはしないか、考えてみる意義があろう。例えば動詞において

*私は 行き（泳ぎ／飲み／生き…）そうだ

のような、一人称主格の「ひとごと」述語に立たない多数に対して

○私は 倒れ（溺れ／吐き／死に…）そうだ

のように、それが適格である少数がある。この少数グループは望ましくない事態という評価的意義を共有し、一人称主格において、主格者の意志にかかわらず勝手に起つてしまうところの、「ひとごと」動詞と位置づけることも可能であろう。どんな動詞でも、それを話手が避けるべき事態、避けたい事態と評価しさえすれば

私は 行き（泳ぎ／飲み／生き…）そうだ

もすべて適格となるが、臨時随時の評価でなく、常時の言わば意義

素性として「ひとごと」性を備えた動詞が立てられそうに思うのである。また例えば形容(動)詞を、有情主だけを主格にとるもの、無情主だけを主格にとるもの、の二分と、「わがごと」系「ひとごと」系の二分とを交又させた

有情主 「嬉しい・淋しい・好きだ」類——わがごと
「大人しい・たくましい・素直だ」類

無情主 「ぶ厚い・明るい・静かだ」類——ひとごと

のような形に整理することも可能でないか。この交又分類は、人間が対象に接しておこす心的反応は、本来有情主のものであるはずだが、それを「わがごと」的に把握するか「ひとごと」的に把握するかが岐れ道となつて、後者は無情主形容(動)詞の一部となつてしまふ、という動きを見通しに含むものである。「淋しい・楽しい」と言へば主體的にのめり込んだ「わがごと」的反応であり、「つまらない・面白い」というあたりから、对象的に見つめた「ひとごと」的反応に移り始める、といった方向へ問題を発展させることが出来るように思われる。

ここで「わがごと」系の形容(動)詞として挙げたものは、「私は」の主格しか取らず、そのままでは「ずいぶん」とは共起しない一群であつて、話は本稿の最初の問題に帰つて来るのである。だからそこから逆に、「ずいぶん」と同じ振舞いをするものを「ひとごと」系として、副詞の内部分類を施すことが出来るかも知れない。詳しい吟味は今後として、程度副詞に関する限りで現在の試案を示せば

ひとごと系——ずいぶん、ずっと、よほど、いつそう、はるか
に、至つて、大ぶん、相当、かなり、なかなか、わりに、け
つこう、ごく……

わがごと系——大へん、非常に、きわめて、はなはだ、とても、
ばかに、やけに、すこし、ちよつと、いささか……

のようにならうか。もしこれが大勢として誤りなければ、発見系対比較系、評価系対非評価系という程度副詞の内部対立とは、また異なる第三の対立原理として、程度副詞の体系を立体的に把握するのに有効かと期待される。

これらはしかし、文法論の領域を脱した、意義論の領域のことかも知れないから、文法論領域に話をもちせば、接続法に關しても、「わがごと・ひとごと」の観點の導入が有効かも知れない節がある。

彼は ずいぶん 乱暴だ

は、主格も副詞も述語形容動詞も、みな「ひとごと」系で適格であるにもかかわらず

*彼が ずいぶん 乱暴なら……

*彼が ずいぶん 乱暴でも……

と仮定条件接続に再展叙すると、確定・仮定の差を超えて不適格となり、確定条件接続の

彼は ずいぶん 乱暴だから……

彼は ずいぶん 乱暴だけれども……

が適格であるのと、完全な対立を示すのである。他の「ひとごと」副詞による表現でも、事情はほぼ同様と言つてよからう。そして仮定条件接続とは、まだ実現していない事態を話手が思い描く表現であり、一方の確定条件接続とは、すでに実現した事態を話手が受け入れる表現なのだから、仮定条件は「わがごと」としての接続、確定条件は「ひとごと」としての接続、と位置づけてよいのではないかと思われる。ただしこれと同じ現象は

○せめて 還暦まで 勤めたい

(*せめて 還暦まで 勤めそうだ)

* 勤めなければ

* 勤めたくても

○ 勤めたいから

○ 勤めたいけれども

のように、「わがこと」系と思われる副詞にも見られる事実であることは、安易な結論をためらわせるのに十分である。評価性を意義に含む要素は既実現の表現との共起に偏る、という事実は既に知られていて、^{注3}確定条件の既実現性の線から解釈する方が、射程が大きいかわからないが、そうなればそうだったで、既実現ということをもはや話手にとつてどうしようもない事態として、「ひとごと」ということに組み入れる検討が、意味を持つと考える。

文法論の領域外のことかも知れない、という心配なしに採り上げ得る一つは、「のだ」構文の「ひとごと」性であろう。

私は 嬉しい

私は 行くのだ

という二文の違いは、日本語教育の世界で論じられて来たが^{注4}

彼は 嬉しいのだ (*彼は嬉しい)

彼は 行きたいのだ (*彼は行きたい)

のように、「ひとごと」主格の不適切表現が、「のだ」を添えると適切になってしまう。「わがこと」主格の不適切表現の方は、「私」そのものを「ひとごと」化しない限り

*私は 嬉しそうだ (*私は嬉しそうだ)

*私は 行きそうだ (*私は行きそうだ)

のように適切転換することはなく、「のだ」の「ひとごと」性は明瞭であろう。「のだ」を添えることは、述語の中に形式上陳述と分離できない形で紛れ込んでいる叙述内容を、「の」によって陳述から形式上切り離し、あらためて断定の陳述を「だ」で下す、という操作の言語化である。この叙述内容の切り離しは、陳述の対象の位置にしっかりと叙述内容を据えるためであつて、表現の対象化、本稿で言いつづけて来た「ひとごと」化に外ならないと思われる。

私は 行くのだ

が、主張であつたり説明であつたりするのは、「ひとごと」化の客観性の効果に違いないし、

彼女も 行くのだろう

が、悲観的な見通しであつたりするのは、「ひとごと」化が、話手がどうすることも出来ない^{注5}と見てとる表現となるケースであろう。もとよりこれらの表現効果が生ずるには、「の」による「ひとごと」化を経た上で、それを結局は再び話手の陳述に持ち込むということが条件となっている。一旦話手の手の及ばぬ世界のこと、と話手から離れた上で、それを話手の判断とすることが、言うまでもないこと、どうしようもないこと、の表現となるのに違いない。しかもこれは「のだ」だけの話ではなく

はず(ため／ところ／だけ／とおり／そう／よう……)だ

など、形式名詞に「だ」が添つて述語の形をとつていながら、主語の補いようもない言い方を始め、主語のない「変則述語」^{注5}一般に共通するところの、話手が己の思い入れを表現する主体的意義表現の形と考えられる。主語の補いようもない言い方だけに、それらの一部はほとんど助動詞のような印象を与える。「そうだ」「ようだ」が

助動詞と扱われて来たのは恐らくそのためだし、もしそれを認めるなら「のだ・はずだ」以下も助動詞に編入すべきだろうが、やはり形式名詞に「だ」を添えて変則述語として、一旦「ひとごと」化してそれへの思いを述べる表現法、と位置づけるのが適当なように思われる。

最後に「わがこと・ひとごと」の観点が、通時論にも有効であることを示すのでないか、と思われる問題の一つにふれておく。指示詞の変遷である。というのは現代語の指示は

(近称) こ系 話手に近いもの

(中称) そ系 聞手に近いもの

(遠称) あ系 話手・聞手に遠いもの

という体系にあるが、「こ・そ・あ」に対応する古代語の指示「こ・そ・か」は、必ずしも現代語の指示体系と一致しないことが知られている。^{注6} 例えば

猶れいの人のやうに、これなわらひそ(枕草子 五段)

の「これ」は、平生昌を指すもので、この場に居合わせない点からは遠称が、清少納言達の話題になっていた点からは中称が、それぞれ使われてもよい所を、近称で指す例、

「さて何事ぞ」とのたまはすれば、申しつる事を「ざなん」と啓

すれば(枕草子 五段)

の「ざ」は、自分の言ったことを指すのだから近称を使ってよい所を、中称で指す例、である。これは多分、古代語の近称「こ」はわが身にかかわらせる「わがこと」の指示(生昌は中宮が身を寄せているこの家の主である)、中称「そ」はわが身から離れた「ひとごと」の指示(自分の考えでも言ってしまったことと把握すれば既に自分を離れてい

る)であった、と考えて解すべき事実であろう。そうした「わがこと・ひとごと」的な主体的指示から、話手領域・聞手領域という対象的指示へと指示法が変遷したらしいのだが、その際に近称が話手領域となったのは、もともとそれが「わがこと」指示であったからであり、中称が聞手領域指示となったのも、もともとそれが「ひとごと」指示であればこそであった、と解してよいのでないか、と考えたい。

「わがこと・ひとごと」という観点に思い及んで以来、うまく整理がつかないまま、それが構文論・意味論に広く深くからみそうだと考えつづけて来た。その一端をこの機会に提供してみたいつもりだが、問題の羅列に終ったような所は、整理がつかぬことの正直な反映であって、なお現象の記述とそれへの解釈を重ねたく思う。批判・助言・応援の与えられんことを。

注1 渡辺「程度副詞の体系」(上智大学・国文学論集23)

注2 渡辺「叙述と陳述」(国語学13・14輯)

注3 工藤浩「程度副詞をめぐって」(副用語の研究)所収)

注4 例えば佐治圭三「くのだ」の本質」(日語学習と研究、一九八一年第三号)。なお田野村忠温「現代日本語の文法」参照。

注5 渡辺「平安朝文章史」第十節

注6 堀口和吉「指示詞コソア考」(論集日本文学・日本語5)、橋本四郎

「指示語の史的展開(講座日本語学2)。なお以下の考えの大筋は、上智大学外国語学部フランス語学科卒業生、時本美穂のDEA論文への個人的意見として述べた所で、引用例は彼女の論文のもの。